

## 令和4年度学術賞受賞者

### 内 富 庸 介 博 士

国立がん研究センターがん対策研究所  
研究統括（支持・サバイバーシップ）



**研究業績** がん患者のストレスと支持・緩和・心のケア法の開発  
Development of Supportive, Palliative, and Psychosocial Care for Cancer Distress

#### 内富庸介博士のプロフィール

内富庸介博士は、1959年、穏やかな海と緑豊かな山に囲まれた瀬戸内の、石油コンビナートの町、山口県徳山市（現周南市）に生まれました。図画と算数ドリルが得意な小学生だったそうですが、中学校に入って夢中になったバンド活動の仲間を白血病で、同級生を脳腫瘍で相次いで亡くしてから、医療奉仕、生と死に関心を深めるようになりました。その後、実家を離れて広島大学医学部に進み臨床実習前の3年生の時に、両親や兄と並んで身近な存在だった祖父を喉頭がんで亡くし、その時に何もできなかったことが随分と悔しかったそうです。

1984年、大学を卒業後、脳と心の科学に関心を持ったことから神経精神医学教室に入局し、すぐさま国立呉病院精神科に派遣されました。高齢化の波により精神科病院入院中の患者さんのがんや生活習慣病が多く見つかるようになり、地域医療の要の呉病院はその転院治療が急増する時代でした。精神科医としてがん治療や手術を外科医に依頼する際に、がん告知されていない患者さんの不眠や不安を外科医が難渋していることを知りました。そこではじめて海外には縦割り医療を打破して多職種チーム医療を支えるリエゾン（連携）精神医学という学際領域があることを知り、上司の山脇成人教授と、当時としては珍しいリエゾン回診、つまり精神科医が外科・内科病棟を回診してがん患者さんのつらさを拾い上げる連携チーム医療をはじめました。

1991年、世界最先端のリエゾン精神医学を実践している、米国スロン・ケタリングがんセンター記念病院ジミー・ホランド部長のもとで心のケアを学ぶため渡米しました。当時、乳がん多発家系をもつ若い女性のがん未発症の乳房を予防的に切除する手術を受けその際に精神科医がチーム医療に加わるといった、まるでジョン万次郎のような、異次元のがん医療と心のケアを体験しました。

1995年、日本で初めて患者さん全員にがん告知をはじめた国立がん研究センター東病院に精神腫瘍学研究部創設のために異動しました。欧米と違うがん告知の在り方について、日本ではどう向き合えばよいのか、前例のないがん告知後のストレス対策が大命題となり、今回の受賞テーマにつながりました。博士は、良き医療者、良き研究者、そして家族に恵まれ、いつもニコニコとケアの開発を楽しそうに語る博士の研究姿勢には、多くの若手研究者が共感し、育っています。

（文責 若林 敬二）

## 業績のあらまし

内富博士は、緩和ケアと精神腫瘍学の黎明期にあつて、がん告知が日本社会に急速に拡がった1990年代に、社会医学、精神医学、心理学の手法を導入して、日本で初めて経験するがん告知ストレスの機序解明とその対策法の確立に努め、日本の対話文化や価値観を考慮したケア法の開発で顕著な業績を挙げ、社会実装につなげてきました。

がんの全経過（遺伝子検査、診断、再発、治療中止時）に一人一人面接調査を行い、いわゆるがん告知に関連したストレス（うつ・不安）を抱えた方が全経過に高頻度（5-42%）に存在することを明らかにしました。そのストレスは、最初のがん告知の際のストレス反応が重い方ほど強く出現すること、次いで、身体的、心理的、社会的要因が多様に関連することを明らかにしました。

さらに、がん告知に関して患者さんに調査を行い、米国と比較して、日本では気持ちへの配慮をより望むこと、そして、他の患者の質問内容を事前に知って備えたい意向があることを明らかにしました。そこで、患者の気持ちに配慮する言動を促す医師対象の対話技術研修法を開発し、患者が事前にかん治療への希望や価値観を整理して医師の診察に臨めるようにしました。

対話技術研修法を修了したがん診療医は、患者の気持ちに配慮する言動が顕著に増加することが確認され、一方で、その受持ち患者は医師への信頼感を増しストレスを減らしていることを世界に先駆けて実証しました。対話技術研修法は、厚生労働省や学会による緩和ケア研修会の中でがん診療医必須の学習項目となり、現在までに、約16万人が修了しています。研修法は日米のがん診療ガイドラインに収載され、気持ちへの配慮を重視する台湾、中国、韓国にも展開しています。

また、近年、がん治療中、治療後のサバイバーの長期にわたる副作用や多様化するニーズに対応するため、2016年、代表者として内外の臨床家と研究者に呼びかけ、研究の計画段階からがん患者と共に開発を行う日本がん支持療法研究グループ（J-SUPPORT）を設立しました。多様化するニーズに、患者、市民、看護師、薬剤師、心理師、医師等の多職種・多面的複合介入で応じ、オールジャパン体制で迅速に開発を進めた結果、一例として患者の睡眠も同時に改善する新規制吐療法の開発につなげました。

以上、内富博士は、がん患者のストレスに対して、日本の対話文化を考慮に入れた支持・緩和・心のケア法の開発に顕著な業績を挙げ、社会実装につなげてきました。これらの成果は、我が国発の世界に誇るべき医療貢献、特にアジアのがん患者に好ましい影響を与えることになった、大きな成果といえると思います。（文責 若林 敬二）

## 略 歴

1984年 広島大学医学部卒業（1993年医学博士）  
国立呉病院研修医、レジデント、精神科医師  
1991年 厚生省留学制度（米国スロン・ケタリングがんセンター記念病院）  
1992年 広島大学医学部精神科神経科助手、講師  
1995年 国立がんセンター研究所支所精神腫瘍学研究部 QOL研究室長（千葉県柏市）  
2005年 同 東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部部长  
2010年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経病態学教室教授  
2015年 国立がん研究センター支持療法開発センター長（東京都中央区築地）  
2020年 同 がん対策研究所研究統括（支持・サバイバーシップ）、現在に至る